



料もついているわけです。そして同じことを敢えて繰り返すということをしました。それは意図があったということも先にも触れましたけれども、どういう意図だったかと言いますとちょうどバビロン捕囚解放後の話で、人々はバビロンからようやく祖国に帰還して来たわけです。そして帰還して当然荒廃していた廢墟となっていた自分たちの国をもう一度立て直そうと、再興しようと皆意気揚々と帰って来たわけです。解放感に満たされて喜びと期待に胸を膨らませてやって来たわけですが、でもその故国再興には沢山の試練、苦難もあったわけです。なかなか思ったように再興が、再建が進まない。そうすると萎えてしまう人もあったわけです。妨害等を受けていると、もう疲れてきたと。いくらやっても壊されてしまうとか、もう一度修理をしてもまたそこを意図的に意地悪されて壊されてしまうとか。また、もうバビロンの国で長らく神礼拝から遠ざかっていた人たちは靈的ではなくて、実に肉的になっていたわけです。世俗的になっていたわけです。偶像礼拝や偶像礼拝に伴う様々な不道德なライフスタイルにも染まっていて影響も受けていたわけです。そういう人たちが改めてエルサレムに行って、そして戻ってそこで神殿を建て直して神殿礼拝を始めるといふ時になると、もう無関心になってしまって、そのようなことに重要性を覚えなくなってしまって、「わざわざ時間を使って犠牲を払って神殿に行かなければいけないのか。面倒くさい。そんな暇があったら、そんな時間があったらもっと楽しいことをしたい。もっとこの世で役に立つようなことをしたい。」とそういう輩も出てきたわけです。だから国がなかなかまとまらない。バックスライドするような、むしろバビロン捕囚の前の時代、背教していた時代に人々は戻ろうとしていたわけです。そちらの方に今傾こうとしていたわけです。ですからそこで危機感を覚えた靈的リーダーであったエズラという人は、「もう一度この民を神のもとに戻さなければいけない。(リバイバルということです。)もう一度この墮落してしまった、靈的に頑なになってしまった民を神のもとへ。」神を礼拝する喜びを取り戻すために、彼らを何とかしたいということでこの**歴代誌**を書いたわけです。「過去を振り返り原点に立ち返ろうじゃないか。私たちはどういうところからやって来たのか。そして神は私たちのような者を見捨てずに、そして私たちを真実な愛をもって誠実を尽くして憐れみを豊かに注いで今まで滅ぼさずに守ってきて下さった、養い続けて下さった、祝福し続けて下さった。」そのことをもう一度省みて思い起こさせるように、初めの愛に立ち返らせるようにエズラはこの記録を残したわけです。ですから皆さんの中にもひょっとしたら、「ちょっと最近では靈的に停滞気味である、低迷状態である、スランプ状態である。何かちょっとドライだ、渴いている。昔はもっと喜んでいたので、ワクワクしながらエキサイティングな思いで教会に集っていたのに、最近は何か惰性的で、最近重い腰を上げるようにして、仕方がない、行かないと電話がかかってくるでも面倒だし、メールがじゃんじゃん来るのも嫌だし、訪問されるのも嫌だし、しょうがない。行っておこうか。どう思われるか、そのことが気になる。」と、そんな人もあるかもしれません。でも、是非そういう人たちにもう一度原点に立ち返るように。私たちはどういうところから救われてきたのか。イエスに出会う前の自分をもう一度思い出して下さい。私たちは罪と罪過のうちに死んでいた者です。生まれながらに御怒りを受けるべき子らだったのです。滅ぼされて当然。地獄行が相当だった者です。でもその私たちは救われました。そして救われていることがもう私たちにとっては当たり前のように思っている。イスラエルの民のように私たちは神に選ばれた者、神の子どもである。確かにその通りですが、でもこれは当たり前のことではないということをもう一度振り返って、そしてフレッシュな思いで、礼拝というものを本当に新鮮な思いで、これまでの継続ではなくて、現状維持ではなくて、益々新しい思いで新しい歌を主にささげ、そして沢山の感謝を、もっと喜びを主に向かって表現する。生き生きとした礼拝、神に喜ばれる礼拝。それを捧げるために今ここに集められています。ですから是非自分自身も重ねながらこの歴代誌を捉えて頂きたいと思えます。そうするとカタカナの羅列も自分にとっては多少関係があるのかなときっと感じて下さっていると思えます。「同じことを繰り返すことに何の意味があるのか、何の重要性があるのか。」重要だからこそ同じことを繰り返すのです。何度も何度も言われること、これが大事なことです。

そして、**第一列王記**と**第二列王記**、これはイスラエルが 2 つに北とに南に分断されての歴史でありました。北イスラエルは 10 部族から成るもので、南ユダ王国は 2 部族です。つまりユダ族とベニヤミン族による国でありました。正統なダビデの血筋の王家が南ユダ王国だったわけです。そのような北の王様たちと南の王様たちがアット・ランダムに入り乱れるような形で行ったり来たりという内容が、そういう記憶が**列王記**というものであったわけです。それと違っ

てこの**歴代誌**は北イスラエルの王様の事はほとんど述べられずに、むしろ南ユダ王国の王様に焦点が絞られています。ですから単純なのです。**列王記**はちょっと困惑したかもしれません。同じような名前が出てきたり、同名別人の人が北の王であり、また南の王であり、一体どっちなのかと迷ってしまったり。もうごっちゃになってしまうという迷いが生じたかもしれませんが、**歴代誌**については南ユダ王国の歴史に絞られています。特にダビデ王家が焦点、ハイライトとなっていますので、そういった意味では分かりやすい。単純でシンプルだということが分かると思います。行ったり来たりという事はありません。南だけです。

早速そのことを踏まえて**1節**を見て欲しいと思います。『<sup>1</sup>アダム、セツ、エノシュ、<sup>2</sup>ケナン、マハラルエル、エレデ、<sup>3</sup>エノク、メシェラ、レメク、<sup>4</sup>ノア、セム、ハム、それにヤペテ。』**4節**まで読みました。このアダムから始まる系図については**創世記**でも皆さんにはお伝えしました。ちょうど**創世記 5章**にもアダムから始まる系図が記録されています。ノアまでの記録です。そういった意味では**創世記**に書かれていることもまた**歴代誌**で繰り返されているわけです。そして同じことが繰り返されているということは、これは重要だということです。重要だからこそわざわざ紙面を割いてもう一度このカタカナの名前の羅列を神様は私たちにも残されているわけです。何度もお伝えしているように神の言葉は全て神の靈感によって、然るべき目的をもって書かれているわけです。**第二テモテ 3:16**にこう書いてあります。『**聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。**』勿論聖書というのは**66巻**を私たちは指しますけれども、パウロがここで聖書と言っているのは、当時はまだ新約聖書が完成していませんでしたから、特にパウロは旧約聖書のことを聖書と呼んでいたわけです。旧約聖書はすべて、勿論新約聖書もそうですが、厳密にはパウロの時代においては、これは旧約聖書を指したわけです。旧約聖書はすべて、カタカナの名前の羅列も含めて、系図も含めて神の靈感によるものです。そして、靈感によって何が大事なのかというと、そこには**教えと戒めと矯正と義の訓練とのために**神の靈感が私たちにこれを備えるわけです。カタカナの名前の羅列からも教えられるのです。戒められるのです。矯正されるのです。そして義の訓練を受けられるのです。このことを信じて、期待をして読んで頂きたいと思います。

そしてこれは**創世記 5章**でも実はお伝えしたことですけれども、敢えて繰り返して説明させて頂きたいと思います。アダムの子供はセツとありますけれども、実際にはセツの前には**2人**の子供がいました。長男はカイン、次男はアベルでした。**創世記 4章**に**2人**の名前を見ることが出来ます。でもなぜか彼らの名前が省かれていきなりセツと。おそらくは**3番目**か、もしかしたらカインとアベルの後にも他にも娘や他の子供があったかもしれませんが、記録に残っている限りでは先にカインとアベルがもう生まれていたわけです。でも彼らの名前は省略されています。勿論そこにも意味があるわけです。皆さんもご存じのようにカインは人類で初めて人を手にかけて、しかも弟を殺した殺人犯です。おぞましい犯罪を犯したわけです。その殺人犯の名前が系図から消されている。勿論そんな殺人犯の名前を系図に載せたいとは誰も思わないと思うのですけれども、でもちゃんと意味があります。私たちの中にもカインの性質があるわけです。カインがアベルのことを面白く思わなかったように、どうしてアベルのいけにえが神に受け入れられて、どうして私のいけにえが神に受け入れられないのか分からない。私の方が優れているのに。どうしてあいつの方が先に昇進するのかとか。どうしてあいつの方が先に自分よりも劣っているのに。腹を立てながら、妬みながら、心の中で憎しみを抱きます。兄弟を憎むならば私たちも殺人犯と同じであります。そして私たちにもそのカインの性質が、言わばカインの血が流れているわけですが、しかし神はそのようなカインの性質をイエス・キリストの血潮によって、アベルの血が流されたように罪のないイエスの血が流されて、その血潮が私たちのカインの性質、罪の性質を洗いきよめてくださったわけです。ですからこの系図の中にカインが消されているのは、その名がないのは私たちの中にあるカインの性質も消されるということを教えられるわけです。すべてイエス・キリストを信じる者には、このキリストの血潮が注がれて、その人の中にある人を憎む思い。妬みや憎しみ、そういった罪の性質がすべて消されるということを覚えて欲しいと思います。そしてそれを体験して欲しいと思います。神はそれが出来る方です。靈感によって神はカインの名前を省かれましたけれども、聖霊が私たちのうちにある罪を示して、そして聖霊が私たちをイエス・キリストのもとへと導き、そしてイエス・キリストの血潮が私たちのその罪の性質を洗いきよめて下さる。聖霊の

働きであります。それも素晴らしいメッセージです。ですからこの 1 節だけでも私はこの時間を全部使うことが出来ます。

でもそういうわけにはいきませんので、次に進んで行きたいと思うのですけれども、アダムからノアまでの 10 人の名前の羅列、これは**創世記 5 章**にも記録されていると言いました。系図と言えはもう無味乾燥。系図は面白くない。そんなふうに使われている人もいたと言いましたけれども、私にとってはディズニーランドのようなところです。系図は本当に楽しくて楽しくて仕方がないところなので、いくらでも止まりたいのですけれども、素通りはできませんけれども、でも簡単にここに書かれていることをポイントを押さえて伝えたいと思います。29 章全部、歴代誌は 29 章からなりますけれども、その 3 分の 1 に当たる 9 章、この**1~9 章**迄がカタカナの名前の羅列です。でも無味乾燥ではありません。そのことを今証明したいと思うのですが、このアダムから始まる系図の名前には一つ一つ勿論意味が与えられています。アダムからノアまでの 10 人です。そして、アダムの名前の意味は皆さんも知っている通り「人」です。人間です。アダムとは「人」という意味です。そして、セツという名前の意味は「定められた」。そして、エノシュは「死ぬべき」。自分の子供に「死ぬべき」なんて普通はつけないと思うのですけれども、でも神様がやはりこれも靈感によって命名させてと思われま。そして、ケナンについては「悲しみ」です。段々沈んでいくような感じですが。そして、5 番目マハラルエルになりますと一気にシフトが変わります。「ほめたたえられる神」と。そして、エレデは「降りて来る」という意味です。そして、エノクは生きたまま天に上げられた、携挙された最初の人ですが、意味は「教える」です。そして、メシェラ。「彼の死はもたらす」実際にメシェラが死んだその年に何かもたらされました。それはあのノアの大洪水です。メシェラという人は人類最長寿の最高齢の記録保持者ですが、彼が死んだその年にノアの大洪水が起こったわけです。そして、9 人目がレメクです。レメクは「絶望する」です。そして、10 人目のノアが「慰め」若しくは「休息」という意味があります。日本人にもそれぞれ意味のある名前が与えられているように、聖書に登場する人物にも意味がある名前が備えられています。そして、特にこれらは預言的な名前ばかりです。普通、親が付けられないような名前ばかりです。アダムは「人間」、セツは「定められた」、そしてエノシュは「死ぬべき」、ケナンは「悲しみ」、マハラルエルは「ほめたたえられる神」、エレデは「降りて来る」、エノクは「教える」、メシェラは「彼の死はもたらす」、レメクは「絶望する」、そしてノアは「慰め」、「休息」です。ピンときた人もいます。創世記 5 章を既に学んでいる方は答えが分かっていると思います。一つの驚くべきメッセージが浮かび上がって来るわけです。ちょっとそこに文章らしく言葉を補いながらアダムからノアまでを読み上げたいと思います。「人は定められた、死ぬべき悲しみに。しかしほめたたえられる神は降りて来て教える。彼の死はもたらす。絶望する者に慰めを。(若しくは休息を。安息を。)」これは一つのメッセージです。これは福音のメッセージです。「人は定められた、死ぬべき悲しみに。罪によって人は死ぬべきものとなりました。しかしほめたたえられる神は、天から降りて来られます。その方こそ人となられた神、イエス・キリストであります。言葉が受肉したわけですが。罪のゆえに死ぬべき者のために天から神は独り子イエス・キリストを遣わして下さったわけです。そしてイエスは地上に居る間、神について教えました。神の国について、救いについて、聖書を教えたわけです。そして、彼の死が、すなわち十字架の死が失われた絶望的な世界に慰め、休息をもたらすことになったわけです。イエス・キリストは最後のアダムと呼ばれています。ルカの福音書にはイエスの系図が載っていますが、その系図はアダムにまで遡ります。ですからこのアダムの系図は実は来るべき救い主の予告をしている福音のメッセージなのです。「人は定められた、死ぬべき悲しみに。しかしほめたたえられる神は降りて来て教える。彼の死はもたらす。絶望する(私にあなたに)休息を、慰めをもたらす。」これが系図に含まれているメッセージです。素晴らしいです。感動します。これは神の靈感によって組み込まれた、仕組まれた秘密のメッセージです。私たちは一読しては気付きません。でも、ヘブル語の意味が分かる人たちからすると、これは一読しただけで震え上がるようなメッセージです。「おお、凄い。」というような。でも、私たちは「アダム、セツ…。もういいや、飛ばそう。」という感じです。訳分からないカタカナの名前の羅列で噛んでしまうと、とても読み続けることは出来ない、飛ばしてしまいますけれども。でも、聖書には無駄は一つもありません。こんな作業をしていきますと当分ここに留まることになりまから、これからちょっとスピーディーに進めて、行けるところまで何とかポイントを

押さえながら皆さんにお伝えしていきたいと思ひます。

**5 節**に目を留めて下さい。ノアの息子たちの系図です。『**5 ヤペテの子孫は、ゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メシエク、ティラス。**』と、これらはすべてロシア、ヨーロッパに散っていった民族です。ヤペテの子孫はヨーロッパ、ロシアに散って行きました。マゴグとか、ヤワン、トバル、メシエク。こういった国名は、地域名はヨーロッパも含めてロシアの南部を指しています。ゴメルなんかはヨーロッパですが、**エゼキエル 37 章**に世の終りになりますとこれまでになかったほどの規模の中東戦争が勃発するということが預言されています。その中東戦争はイスラエルに対する戦争で、ロシアとそして今のアラブ諸国の連合軍が核を使った戦争を引き起こすわけです。多勢に無勢というような戦争をこれまでも中東ではイスラエルは強いられてきたわけですがけれども 1 度も負けた事はありません。そして、世の終りになりますともう一度中東戦争が起きます。これまでにない規模です。実際に核が使われるということすら続きを見て頂くと、**エゼキエル 37 章 38 章**を読んで頂くと克明に書かれています。核兵器が使われた後の事後処理までしている預言があるわけです。そこに国名も出ています。ロシアも出て来ますし、他にはペルシャ(今のイランです。)、他にもトルコであったり、また北アフリカの諸国(エチオピアとかスーダンといった国々。)イスラム教の国々です。これらの連合軍が世の終りになるとイスラエルに侵攻してくるということが預言されています。そして、その国名が実はヤペテの子孫たちの国々ということなんです。

またテキストに目を戻して頂きたいと思ひます。**6 節**に『**ゴメルの子孫は、アシュケナズ、ディファテ、トガルマ。**』と、これもヤペテの子孫ですがけれども、敢えてここを読み上げたのは、“アシュケナズ”という言葉に注目して頂きたかったからであります。“アシュケナズ”というのは、知っている方もいると思ひますけれども、ユダヤ人には実は 2 種類あります。ユダヤ人には“アシュケナズ”から出ているアシュケナジムと呼ばれる(又はアシュケナジーとも言ひます。)白人系のユダヤ人。特にドイツ語圏のユダヤ人と呼ばれます。東欧諸国などに散ったユダヤ人のことをアシュケナジム若しくはアシュケナジーというユダヤ人です。そして、もう 1 種類は中東、北アフリカ、イスラム圏などに散って、そしてヨーロッパの南欧、スペインやポルトガルに散ったユダヤ人。彼らのことを“セファルディム”と言ひます。若しくは“スフラディー”と言ひますけれども、その 2 種類のユダヤ人に今日は分類されると言ひられています。そして、この 2 種類のユダヤ人たちはあまり仲が良くありません。ユダヤ人でありながらも対立したりしています。非常に対照的な 2 つのグループです。そのうちの 1 つアシュケジム、若しくは“アシュケナジー”は、この“アシュケナズ”から来ています。有名なアシュケナジー、アシュケナジムのユダヤ人の中には、あのアインシュタインもいます。フロイトもいます。精神分析学の父、ジークモンド・フロイトです。他にもカール・マルクス。マルクス主義のあのマルクスです。また、グスタフ・マーラーという音楽を知っている人ならば知らない人はいないと思ひます。指揮者のレオナード・バーンスタインとか、また日本人も皆知っているあのアンネ・フランクもアシュケナジーです。大体イメージがついたと思ひます。アシュケナジーのユダヤ人はどういふメンツなのか分かったと思ひます。

そして一方で“スフラディー”と呼ばれる人たち、若しくは“セファルディム”と呼ばれるスペイン系とも言える、また北アフリカとかイスラム圏に散っていったユダヤ人たち、彼らは有名人であればその昔イギリスが隆盛を極めていた時代の首相、ユダヤ人の首相が唯一居たわけなんです。その頃は英大帝国は栄えていたわけなんです。ユダヤ人を厚遇していた時代、英大帝国は栄えていたわけなんです。ベンジャミン・ディズレーリというイギリスの首相、彼はユダヤ人です。セファルディムのユダヤ人です。スフラディーのユダヤ人です。またアメリカの大統領で言えばルーズベルトです。2 人いますけれども、フランクリン・ルーズベルトの方です。第二次世界大戦のあの時代のルーズベルト、彼もユダヤ人です。そういった有名な人たちもいますけれども、現代大体この 2 種類のユダヤ人の人たちは、ちょうど新約聖書の時代で言うならば、サドカイ派のエリート祭司職の人たちとブルーカラーの律法に厳格なパリサイ人のような違いであります。そんな違いを作り出しています。アシュケナジーの人たちはアインシュタインをはじめ知的階級です。非常に、医者であったり有識者というような人たち、政治家も多いわけなんです。イスラエルの首相は皆アシュケナジムの人たちです。セファルディムのユダヤ人が首相になった事はこれまで建国以来 1 度もありません。全員が全員イスラエルの首相は今のところ白人系のユダヤ人と簡単に言えばそういうことなんです。そして両者の間では富裕層と、そして

ちょっと失業率も高い経済的には不安定なブルーカラーの層(セファルディム)と分かれてしまっていて対立しているわけですね。そのようなユダヤ人の違いも知って下さい。ある人たちは「アシュケナジーは、これはユダヤ人ではない。」と主張する人たちもありますけれども、何がユダヤ人なのか定義はまちまちですけれども実際に聖書において“アシュケナズ”という言葉が出てきて、それがアシュケナジム、若しくはアシュケナジーを指す言葉であります。

次にちょっと飛んで 8 節に『<sup>8</sup> ハムの子孫は、クシュ、ミツライム、プテ、カナン。』とあります。これらは皆アフリカ諸国に散っていった先祖たちであります。クシュというのは今のエチオピア、スーダンです。ミツライム、エジプトとカリビアとかかそうした国々に散っていったわけです。

さらに飛ばして 17 節のところ『<sup>17</sup> セムの子孫は、エラム、アシュル、アルパクシャデ、ルデ、アラム、ウツ、フル、ゲテル、メシェク。』セムの子孫。ノアの息子は 3 人いて、ヤペテ、ハム、そしてセムですが、セムというのは今日セム語系というふうと呼ばれる人たちです。中東のユダヤ人もアラブ人も皆セム語系の人たちと。アフロ・アジア語圏の人たちです。そのようなユダヤ人、特にアラブ人を今日は指して、セム語族と言います。

19 節。『<sup>19</sup> エベルにはふたりの男の子が生まれ、ひとりの名はペレグであった。彼の時代に地が分けられたからである。もうひとりの兄弟の名はヨクタンであった。』とありますが、“エベル”というのがヘブルの同じ言葉です。ヘブライ人、ヘブル人、これはエベルと同じ語源です。意味は「向こう側から渡って来た人」です。ですからユーフラテス川の向こうからやって来た渡来人というのが、ヘブル人の原意です、語彙です。エベルは「渡って来た人たち」渡来人ということですね。そして、次に出てくる名前が 1 人の名はペレグ。エベルの 2 人の息子のうちの 1 人はペレグ。ペレグの名前は勿論創世記の中に見ることが出来ますが、この時代に大きな出来事がありました。それは創世記 10 章に記録されています。そこを見ると“ペレグ”という名前の意味は「分かれる、分裂する」という意味なんですけれども、世界の全地が分かれたと。これは人類が沢山の多民族に分かれたというふうにも捉えることが出来ますし、同時にノアの大洪水の後で大陸が分裂したというふうにも捉えることも出来ます。今世界の大陸を見て頂くとジグソーパズルのようにして海のところを埋めて頂くと、全部 1 つの大陸につながるように、つぎはぎができてるように捉えることができますと思いますが、この時代におそらく陸地が、大陸が分断されたのであろうと。また民族も世界中に分かれ出たのであろうというふうに言われています。大洪水以降です。

24 節。『セム、アルパクシャデ、シェラフ、』24 節からはセムの子孫で、特にそこから 27 節にアブラムという人物、またはアブラハムという人物に繋がっていくわけですが、ここから系図の焦点が完全にイスラエル・ユダヤ人に当てられていきます。アダムは全人類の父であります。そして、ノアは世界の民族を生み出した民族の父と言ってもいいかもしれません。そしてアブラハムは、信仰の父であります。ですから私たちにとってアブラハムというのは、決して遠い存在ではありません。私たちもイエス・キリストを信じる信仰によってアブラハムの子孫になれると。これが新約聖書のメッセージです。アブラハムと同じ信仰を継承する。それは行いによるのではなくて信仰によるもの。信仰義認の流れを汲んでいるのが私たちでもあります。ですからすべて私たちは、イエスを信じる者は、アブラハムの子孫とも言えるわけです。血は勿論民族的には違いますけれども、でも霊的にはアブラハムの子孫であると言えるわけです。そして、そのアブラハムは皆さんも知っての通り 75 歳の時に生まれ育ったカルデアの地ウルという当時は洗練されたメソポタミア文明の中心地でした。その最先端の科学があったり、当時の時代では最も大きな図書館があるようなそのウルという町を、都会をアブラハムは捨てて、故郷を捨てて、財産を捨てて、神に従って、神の召しに従って、彼は神の示す地へと旅をしたわけです。妻のサラ(当時はサライと言いましたが、)アブラムとサライは信仰によってすべてを捨てて、コンフォート・ゾーンを飛び出して神に従ったわけです。神が示す約束の地へ向かったわけです。それは信仰によるものだという事は勿論ヘブル書 11 章に書かれています。ヘブル書 11 章は信仰者列伝です。勇士の殿堂入りを果たした立派な信仰者たちの記録がヘブル 11 章にもあります。すべて、信仰によって、信仰によって、信仰によってと書かれています。アブラハムもサラも信仰によって 75 歳の時に故郷を出て、そして神の示す地へ行ったわけです。そして、その際に約束も与えられました。あなたの子孫は海の砂の数のように、又は空の星の数のように増えるという素晴らしい約束が与えられました。ところがアブラハムとサラの間には、子供は一人も

もいませんでした。アブラムという「偉大な父」という名前からアブラハムと改名して、アブラハムは「多くの国民の父」という意味ですけれども、皮肉な名前です。1人も子供がいないのに「多くの国民の父」とは、名前負けしそうな名前を与えられたわけですけれども、でもやはり86歳の時にアブラハムはその約束を信じたわけです。「今は子供はいない。でも信じます。あなたが言われることならば、あなたには不可能な事はありません。」と、そう信じたわけです。そして、信じてみたけれどもなかなか神様の約束が自分たちの身に起こらないので、「これは自分たちの知恵を絞って何とか神様の約束を成就させねばならぬ。」と、ちっぽけな頭を絞って思いついたのは「若い女奴隷のハガルを使って、そして夫のアブラハムと性的関係を持たせて妊娠させれば、そこから子供が生まれるじゃないか。そして、その子供を養子にすれば、自分たちの子孫はできるじゃないか。これだ。これなら子孫を儲けることができる。そして増やすこともできるだろう。」と思いついて、実際にそうしてしまったわけです。その結果生まれたのが、イシュマエルという子供でした。そして、実際にイシュマエルが生まれてから、大分経ってから13年後ですけれども、実は神様が約束された通りの奇跡が起きたんです。もう枯れた状態で、もう完全に生殖機能を失った状態の老夫婦が、アブラハムとサラが何と子供を儲けるのです。アブラハムが99歳の時に神の約束通りのことが起きたわけです。サラは89歳、そして生まれた時イサクという子供、アブラハムが100歳の時の子供です。凄いですね。ですから75歳の時にアブラハムは約束を受けて、そして25年後の100歳の時に神の約束はすべて成就したわけです。神が約束されてから25年というタイムギャップがあったわけです。それでも**ヘブル11章**によれば、アブラハムは神を信じた。信仰によってという言葉が繰り返し繰り返し書かれています。そして信仰によって、そして忍耐をもって彼は約束のものを手に入れた。約束のものを手に入れるために必要なものは忍耐であると言われてはいますが、でも実際に旧約聖書の**創世記**の記録を読むと、アブラハムは忍耐しないで(サラもそうでしたけれども)、ちっとも約束が遅々として実現しそうもないので、現実的な方法で、代理母という方法でハガルを使って子供を造ったわけです。失敗をしたわけです。でも新約聖書においては、その失敗の事は1つも触れられておりません。逆に、信仰によってとか、忍耐によって、忍耐の末に手に入れたというような事しか書いていません。何故でしょうか。それは神様が旧約聖書の聖徒たちのすべての失敗・失態・罪・汚れ(汚い部分、暗い部分です。)それをイエス・キリストの血潮によって洗い清めて、新約聖書には旧約聖書の生徒たちの罪というものが1つも記録されていないのです。ダビデが犯した罪も新約聖書の中には記録されていないのです。ですから、良い事しか書いてないわけです。素晴らしいグッドニュースです。イエス・キリストによって私たちの過去はすべて消し去られるのです。カインの性質も消し去られますけれども、私たちが信仰の父アブラハムと同じような歩みをしながらも、また忍耐できずに失敗してしまうこともあるわけです。でもそれも全てキリストの血潮によって洗いきよめられる。記録には残らないように、犯罪記録というものが消し去られるわけです。素晴らしい知らせ、良い知らせ、グッドニュース、それが福音です。そして25年間のタイムギャップ。なかなか長い時間ですけれども私たちは25日もたないかもしれません。「25日前に神様は約束されたけれども、とても我慢できない。待ってられない。」短気になって私たちは何とか自分でしなければいけない。自分で動いてしまうかもしれません。自分のちっぽけな知恵で何とかしようとするかもしれません。または25時間も待てないかもしれません。でも失敗したらどうなるのか、そのことも心にしっかりと刻みつけて下さい。イシュマエルが生まれてどうなったのか。イシュマエルは今日のアラブ人の先祖です。4000年経っても未だにイサクの子孫であるユダヤ人とイシュマエルの子孫であるアラブ人は対立し合っているわけです。その弊害というのは、数千年を超えて未だにその影を落としているということ。これを覚えて私たちは忍耐をせずに勝手に動く、神の約束を信じきれずに待てずに勝手なことをしてしまう。これが神の御心だろうと見切り発車をしてしまう。確信を持たずに私たちは我慢できずに物事を判断したり、自分にできることをやってみようしたり、失敗をすることがあります。でもその結果というものが必ず伴うということを知って下さい。勿論神はイエス・キリストの血潮によって罪は赦して下さいます。でも罪の結果は必ず残るということを知りたいと思います。だから気軽に罪を犯してはいけません。赦しは与えられますけれども、罪の結果は残るのです。蒔いた種は必ず芽を出すのです。そして刈り取ることになるわけです。このことは皆さんには何度も何度も口が酸っぱくなるほど伝えていきます。「もうそれは聞いたよ。」と。でも何度も言います。なぜなら私たちは毎

日罪を犯すからです。私も含めてですけれども。結果というものを常に覚えたいと思います。その結果は大抵私たちが想像出来ないものです。想像を超えるものです。まさか数千年後に未だにイシュマエルの子孫がイサクの子孫をいじめるなんて。イシュマエルはイサクをいじめていたわけです。まさにリンチして殺そうとしていた時に、イシュマエルは追い払われて追放されたわけです。そして未だに敵対する者となっています。肉の力によって生み出したもの。それは後から返って来ます。ですから是非神の約束を信じて、そして肉の力で見切り発車したり、神の力を借りずに自分の力でこの聖書の言葉を自分なりに解釈して自分なりに実現してみようなんていうことはやめなくてはなりません。アブラハムの二の舞を踏むことはないわけです。

飛ばして **32 節**。ケトラの息子たちのことが書いてあります。ケトラというのは、サラが死んだ後アブラハムが娶ったもう1人の妻です。そのケトラとの間にも沢山のアブラハムの子供たちが生まれました。そして注目して頂きたいのは特に **32 節**、**33 節**の“**ミデヤン**”という名前です。このミデヤン人というのが、ミデヤンから出た子孫ですけれども、ミデヤン人という名前はもう皆さんも記憶にあると思います。イスラエルの民をいつもいじめていた人たち。いつもイスラエルに食ってかかってきたような人たち、アタックしてきた、戦争を仕掛けてきたような人たち、ミデヤン人です。そのミデヤン人は実は本を正せばアブラハムの子供なんです。ですからアブラハムの子供がそれぞれの民族を形成していくのですが、でも実際にはその親族同士で争い合っているわけです。醜いですね。兄弟同士で争うようなことです。でもこれが罪の性質なのです。カインがアベルを殺した最初の殺人事件から、何も変わっていません。でも何も変わらない呪いの歴史に罪のない方が介入して、私たちのために罪を十字架で負って呪いのすべてを、罰のすべてを受けて下さったわけです。これがなければ私たちは未だ罪の呪いの中に生きていかなければならなかったわけです。イエス・キリストがいなければ、ずっと同じ歴史の繰り返し。空しいです。どうして人間同士が争わなければいけないのか。どうして家族同士が、親族、兄弟同士がこんなにも反目して対立しているがみ合って憎しみ合わなければいけないのか。なかなかその負の連鎖を断ち切ることは出来ないかもしれません。でも諦めないで下さい。絶望しないで下さい。イエス・キリストが介入されれば、すべては変わります。

そして次に **34 節**のところに『**アブラハムはイサクを生んだ。(約束の子です。)イサクの子は、エサウ、イスラエル。**』とあります。“**イスラエル**”というのは勿論ヤコブのことです。ヤコブが後にイスラエルと改名したわけです。エサウは双子の兄。ヤコブは双子の弟で、お腹の中にいた時に、イサクの奥さんのリベカのお腹の中にいた時に、ふたりはもう既にその中でライバル同士、ヤコブは弟でありながら兄のかかとをつかんで、自分が出し抜こうとした。そういうもう胎児の時から露あらわになっていたもので、ヤコブという名前は「かかとを掴む者」。エサウは毛深かったので「毛深い者」エサウと名付けられたわけです。そして、そのエサウからはエドム人という民族が生まれました。そしてヤコブからは後にイスラエルと改名されましたから、イスラエル人が生まれたわけです。ヤコブの性質「かかとを掴む者」人を騙してでも、蹴落としてでも、出し抜いてでも自分がのし上がる。エサウを騙して、父親のイサクを騙して、そして長子の権利を手に入れる。長子の祝福を手に入れる。それがヤコブのやったことです。でも、いつも自分の知略で狡猾なプランで人を出し抜いてきたヤコブもついには行き詰まって、もうどうにもならないところに行きました。兄のエサウに憎まれて、正に一家が、ヤコブの妻も子どもたちもエサウに殺されそうになって。「どうしよう、家族も守れない。自分の命ももうここで絶たれてしまう、どうしよう。」必死になって神に祈りました。一晩中祈ったのです。そしてその時に神の人とヤコブは格闘して、相撲を取って、「あなたが私を祝福してくださなければ、私はあなたを去らせません。」と必死にすぎたわけです。そしてその時に腿のつがいを打たれて、ヤコブは自分の足では最早立なくなりました。自力ではもう歩けなくなったわけです。びっこを引いて杖がなければ歩けない状態。それは正にヤコブが砕かれたということを意味したわけです。これからは自分で歩くのではなくて、この杖に頼りながら痛みを抱えながら砕かれながらも(杖は神の権威です。)、あなたはこれからは神に支配される者、神に統治される者、つまり**イスラエル**と呼ばれると。**イスラエル**という名前の意味は、「神に統治される、支配される者。」であります。そのイスラエルの子孫が、イスラエル人です。イスラエル人というのは、神に支配される者たち。そして私たちが霊的イスラエル人です。これからは自我によって生きるのではなくて、神に頼ってすがって、神に心の王座に就いて頂いて、すべてを支

配して頂いて、神に頼りながら生きる者。それがイスラエル人です。それが私たちです。そのようにして私たちも同じ信仰を継承しているということを感じたいと思います。

そして、先ほどもエサウの子孫がエドム人と言いましたけれども、エドム人は新約聖書ではイドマヤ人と呼ばれて、イドマヤ人は実はヘロデ大王のことであります。ヘロデはイドマヤ人、エドム人だったのです。そしてこのエドム人が、イスラエルの子孫であるダビデの子と呼ばれる、約束のメシアとも呼ばれたイエス・キリストを抹殺して(自分がユダヤ人の王なのに、約束のメシアが来ると王位を奪われてしまう。)ですから幼児の段階で殺してしまおうと、2歳以下の男子をイエスが生まれたとされるその地域のすべての男子を虐殺したわけです。その虐殺を命じたのがイドマヤ人です、エドム人です。でも勿論イエスは守られて、そしてそのような殺され方ではなくて人類のすべての罪を負ってゴルゴダの丘で十字架にかかって死なれるという死に方をされたわけです。

そして、**43 節**以降にもエサウの子孫たち。彼らも名を馳せて、それぞれが王となっています。『**イスラエル人の王が治める以前、エドムの地で治めた王たちは次のとおりである。ベオルの子ベラ。その町の名はディヌハバであった。**』続きもございますけれども、イスラエルの子孫たちが王になる前、王として国を治める前に既にエドムの人たち、エドム人たちはもう王国を築いていたということが言われています。イスラエルの人たちは神に支配されるものだから、イスラエルにとって王というのは人間ではなくて神だったわけです。イスラエルは常に神権政治、神が支配する、それがイスラエルの特徴だったわけです。イスラエル以外は人間が支配していたわけです。エサウの子孫と同じように。でも、ある時になったら「否、我々はもう神に支配されるのは御免だ。他の周辺諸国のように、エドム人たちのように我々にも王様が欲しい。周辺諸国のように王様が欲しい。」と言い出したわけです。それがサムエルの時代です。サムエルは心を痛めました。サムエルもイスラエルの霊的リーダーとして、さばきつかさとして、預言者としてイスラエルを治めていたわけですが、裁いていたわけですが、「あなたはもう要らない。私たちはエドムのように、周辺諸国のように王様が欲しい。」そして、その結果彼らに与えられたのがあのサウルであったわけです。そしてサウルが与えられてからイスラエルは霊的にどんどん低迷していったわけです。墮落の一途をたどっていったわけです。そしてどんどん弱体化していったわけです。バックスライドしていったわけです。神が王である間、大丈夫でした。でも、神が王でなくなってから、人間が王となってからはイスラエルという国もどんどん衰退していくわけです。ここから学ぶことはあると思います。あなたはイスラエル人でしょうか。神に支配されている者でしょうか。クリスチャンなのにあなたの心の王座には誰が着いているでしょうか。あなたは自分が自分の心を治めて、自分の思いつきで、自分のやりたいように、自分の望み通りに、人生を今思い通りにしようとしているならば、あなたはどんどん霊的に低迷して、墮落して、バックスライドして、そしてサウルによって治められたあの退廃しきったイスラエルのように落ちていきます。ですから今、今晚、是非あなたが先ずは心の王座から降りて、「どうぞ主よ、あなたが王となって私の心の王座に着いて下さい。私の人生をあなたがコントロールして下さい。」ヤコブのようにもしかしたらあなたは今もう格闘しながら「もうもうどうして良いか分からない。とにかく神様何とかして下さい。もう私ではどうにもならないのです。もうコントロール出来ません。」是非そういう人もイスラエルになって欲しいと思います。そのためには一撃を受けなければいけないかもしれません。腿のつがいを打たれる。当然痛いです。脱臼するだけでも私たちは痛いですが、<sup>びっこ</sup>一生涯跛を引くようなそういう痛手を被るかもしれません。それでも価値があります。それだけあなたが頑なだから、そういう必要性があるわけですが、恐れてはいけません。イスラエルになればあなたは祝福されます。ヤコブはまさに長子の権利も、長男の祝福も受けて、そして神に大いなる恵みの取り扱いを受けられるようになったわけです。そして祝福され、繁栄されていったわけです。あの出し抜く者が、あの騙す者が、あの詐欺師が変えられたわけです。私たちの中にあるヤコブの性質も変えられます。

今度は **2 章**の方に移りたいと思います。ヤコブの子孫です。イスラエルの子というのはヤコブの子孫です。12 人の子どもがヤコブとラケル、そしてラケルの姉レアの間から、そしてそれぞれの女奴隷の間から生まれていったわけです。非常に複雑な家系ではありましたが、12 人の子供が生まれたわけです。そして、その 12 人の子供の中で特に際立っていたのが **3 節**のユダという人物です。なぜならばこのユダからダビデが生まれ、そしてダビデから

ダビデの子と呼ばれる救い主イエス・キリストがお生まれになるからです。そして、ユダの子供にエル、オナン、シェラの3人が与えられますが、それぞれが続きを見て頂くと『**カナンの女シュアの娘から彼に生まれた。しかし、ユダの長子エルは主の目の前に悪を行ったため、主が彼を殺された。**』主が彼を殺されたとあります。そして**7節**を見て頂くと、さらにその子孫で『**カルミの子は、聖絶のものの中で罪を犯し、イスラエルにわざわいをもたらす者となったアカル。**』アカルというのは、アカンのことです。アカンについては**ヨシュア記 7章 1節**に出ています。このアカンはどんなアカンことをしたかと言いますと、神様のものに手をつけてしまったわけです。エリコの町を彼らが攻略した時にそこでの分捕り物、戦利品は全て神に捧げなさいと。金銀も、そこにある高級衣服も、バビロン製の当時のブランド品、高級なブティックのそういった衣服も全て神に捧げなさいと。これは神が命じられたのですが、アカンはそれらの贅沢品に目がくらんで、金銀、そしてバビロンの高級衣服を家に持ち帰って、自分の天幕のテントの下に隠してしまったわけです。そしてそのことが神様に勿論知られていて、結果次の町アイという町の攻略においてその罪が明らかにされます。アイの攻略で彼らは失敗するのですが、その原因はアカンの罪が原因だったということで、イスラエルは全体で非常に大きな痛手を被るわけですが、そのことが示されて、罪が原因であったということが明らかになって、そしてその結果アカンとアカンの家族は殺されるわけです。ユダの息子の長男のエルも悪事を働いて殺されたように、アカンも殺されてしまうわけです。罪がもたらすもの、それは死です。『**罪から来る報酬は死です。**』と**ローマ 6章 23節**に書いてあります。蒔いた種は必ず刈り取ると先程も言いました。それがもしかしたら今晚ここに集まっているあなたへの神からの個人的なメッセージかもしれません。今あなたが罪を犯しているならば、今晚それをあなたはやめなければいけません。神様は「今犯している罪をやめなさい。」と、その人に言われているのではないかと思います。「やめなさい。そうでなければあなたにもたらされることを思い知るように。」罪から来る報酬は死です。人は蒔いた種を必ず刈り取ります。神は侮られるような方ではありません。誰にも知られない、分からない、見つからない。すべての罪は葬り去られた。隠ぺいされた。」と思われるかもしれませんが、実際には神はすべてご存知です。そして罪が必ずあなたを見つけます。そして、罪の結果というのは先程も触れたように、あなたが想像する以上のおぞましいものです。あなたも痛手を被りますが、あなたの愛する者たちも巻き込まれるということを知って下さい。アカンとアカンの家族も結局殺されたわけです。罪がどんなにおぞましい弊害をもたらすのか。それを知りたければ、イエス・キリストのあの無残な死を思って頂きたいと思います。罪のない方が私たちの罪によってどこまで酷い目に合わされたのか。あれが罪の成すことなのです。もう人間とは思えないほど、体中腫れ上がって、<sup>みみず</sup>蚯蚓腫れどころではない。ローマの拷問の鞭によって皮膚は裂かれ、肉は裂かれ、内蔵が飛び出しそうな状態。とても正視できない状態。人間とは思えないほどに、もうボロボロの状態です。それが罪の成すことなのです。ですから是非気軽に罪を犯したり、又は罪をやめずに犯し続けるなんていうことは絶対にやめて欲しいと思います。それが神様からのあなたへの、今晚今ここにいるあなたへのメッセージであるということを受け止めて欲しいと思います。

そして**12節**に今度は飛んで下さい。ボアズという名前が出てきます。ボアズという人は**ルツ記**に出て来ますが、**ルツ記**のルツ、彼女がヒロインですけれどもヒーローはボアズです。ボアズは実はイエス・キリストの型であり、ルツはイスラエル人ではなくて外国人です。モアブ人ですけれども、異邦人ですけれどもユダヤ人の男性と結婚して幸せになります。ですからキリストと結婚した異邦人、異教徒、私たちのことです。ルツは教会の型です。キリストと教会の美しい関係を表しているのが**ルツ記**というところです。既にもう詳しく学んで来ましたが、ボアズが代価を払ってルツを買い戻す、贖うのです。まさにイエス・キリストが成して下さったことです。イエスの場合は自分の命の代価をもって私たち花嫁を買い取って下さったわけです。罪の奴隷から解放して下さい。そしてその間に生まれたのがオベデ、そしてオベデからエッサイ、そしてエッサイからダビデが生まれたわけです。

**15節**に目を移して下さい。そこには『**六男オツェム、七男ダビデを生んだ。**』とあります。「ちょっと待って下さい。**第一サムエル 17章 12~14節**には、ダビデは八番目の子供の末っ子だったと記録されていることを思い出しました。八男がどうしてここでは七男なんですか。聖書はやはり矛盾だらけ。」こうい

ころを重箱の隅をつつくようにして「だから聖書は信用出来ないんだ。」と言い出す人があるわけですが、これはそんなに大変な話ではありません。単純な話です。単純にダビデの兄が死んだと。だから 7 人です。お兄さんが何らかの形で亡くなったと思いますから、これはバビロン捕囚の解放後に書かれたものです。その間に勿論ダビデも死んでいますけれども、サムエル記の段階では 8 人いたエッサイの息子たち。そのうちの 1 人が亡くなったのでダビデは 8 番目から 7 番目に繰り上がったということです。単純にそういうことで説明出来るわけです。矛盾があるわけではありません。

**16 節。『彼らの姉妹はツェルヤとアビガイルであり**（ダビデには妹がいたということです。二人のうちの一人アビガイルは、ダビデの妻の名前でもあります。同名ですが別人です。そしてダビデにはさらに甥たちもいたわけです。三人の甥。それが）、**ツェルヤの子は、アブシャイ、ヨアブ、アサエルの三人であった。』**そして **17 節**には、アビガイルの子供、アマサです。三人の甥、これはダビデの片腕となります。將軍となるわけです。ダビデの姉か妹か分かりませんが、おそらく姉だと思えますけれども。どちらかの子供たちがそれぞれダビデを支える、ダビデ王朝の要となっていくのですけれども、その一方で **17 節**の、そのアビガイルの方の子ども、やはりダビデの甥ですけれどもアマサはダビデの將軍ではなくて、ダビデの息子アブシャロムの將軍となっています。アブシャロムと言えば、超美形のロングヘアのカリスマ性のあるリーダーであったわけです。お父さんに取って代わろうとしてクーデターを起こした謀反人でありました。そのアブシャロムに付いたのがアマサであったわけです。明暗が分かれるところでした。

そして今度は **3 章**に行きたいと思えます。ここではヘブロンで生まれたダビデの子。ダビデに焦点が当てられていきます。ダビデには全部で 19 人の子供がいたと思われましても、19 人全部ドラ息子です。ダメ息子です。強いて言えばソロモンだけです。ソロモンの半生は素晴らしかったと思えます。でも後世は**伝道者の書**に記されているように、彼はどんどんバックスライドしていったわけです。神の御言葉に反することをしだしたわけです。妻を多く増やしてはならないと言われたのに増やしたり、馬を多く持つてはならないと言うのに馬を多く持ったり、金銀財宝もどんどん持つようになって。ソロモンはこの世のありとあらゆる栄光栄華を極めながらも、この世の快樂に溺れていってしまう。異教徒の女性たちが持ち込んだ異教の風習、性的不道德の伴う快樂に満ちたそのようなエクスタシーを求めて、どんどん墮ちていくわけです。知識も極めてきました。学歴を極め、そして好きな綺麗な女性たちを侍らせて、財産も手に入れて、名誉も地位も手に入れて、何もかもこの世のすべてを手に入れたかのように見えたソロモンの中には、常に『**空の空、すべては空。**』その言葉がこだましていたわけです。その哲学書が**伝道者の書**と呼ばれるものです。すべて虚しいのだと、ソロモンは告白しています。最後それに気付いたので、『**結局は全て聞かされていることだ。神の命令を守れ。それがすべてである。**』という結論に至ったので幸いでしたけれども、でもほとんどソロモン以外、全部ダメ息子と言っていると思えます。

そして、ダビデは素晴らしい王でありました、英雄でありました。国も安定したわけです。安泰したわけですが、しかし家庭は滅茶苦茶だったということです。このことも皆さんにしっかり心に刻みつけて頂きたいと思えます。多くの父親たち、夫たちは、外では立派です。外では偉そうにしています。でも、家庭ではどうでしょうか。仕事は成功しています。安定しています。順調です。でも、家庭はどうでしょうか。妻を省みているでしょうか。子供たちはどうでしょうか。仕事ばかりで家庭をおろそかにしていないでしょうか。牧師の家庭も変わりません。ミニストリーとか、牧会とか、カウンセリングだとか、伝道だと言いながら、どんどん家庭から離れて外で働くことがあって、外では「牧師先生、お世話になります。本当に感謝しております。あなたのおかげで救われました。」とか、「先生、先生。」と言われながらいい気になっていくわけです。「あなたが必要なんです。」と皆から言われます。でも家庭では、あなたは夫なのです。妻はあなたを必要としているのです。子供たちも父親であるあなたを必要としているのです。外では企業戦士で苦勞しているかもしれません。ストレスにも耐えながら、家族のためにと大気名分をつ

けながら外では頑張っている。外面そとづらは良い。皆からは、欠かせない人、「あなたがいなければ会社が傾いてしまう。」とか、そんなことを言われるわけです。絶対にそんなことはありません。辞めてみれば分かると思います。あなたがなくなっても何も変わりませんから。でも、家庭はあなたにしか治められない。他の夫を連れてくるわけにはいかないのです。代用となる人はいないのです。会社だったらいくらでも首を挿げ替えればいいのです。代用の雇用をすればいいのです。代わりはいくらでもいます。でも家庭ではあなたの代わりはいないのです。ダビデは家庭をおろそかにしたんです。ですから子供たちは皆落ちていったんです。皆、墮落していったんです。皆、不信仰に、不敬虔に神から離れて行ってしまったんです。これは悲しみを通り越す痛みです。嘆きでしかありません。仕事では成功したのに、国は安定したのに、繁栄したのに、隆盛を極めたのに。名誉も手に入れたのに。でも家ではダメ夫、家ではダメオヤジ。がっかりです。子供たちは一生涯傷を負って行きます。

**第3ヨハネの手紙4節**にこう書いてあります。『私の子どもたちが真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。』これをここにいる親の皆さんに伝えたいと思います。私の子どもたちが（あなたがそのことを自分に当てはめて読んで欲しいと思います。）真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。これを言い換えれば「私の子どもたちが神とともに歩む。真理であるお方イエス・キリストと歩む。それ以上の喜びは他にはありません。」イエスと共に歩まずにこの世で高学歴を持って理想の会社に就職したところで、首尾よく就職できて、首尾よく結婚できて、首尾よく子供にも恵まれて、何の不自由ない、誰もが羨むような家庭を築いたとしてもです。それでも自分の子供たちが、孫たちがキリストとともに歩んでいないならば、それは一生の痛みです。悲しみです。この世で栄光栄華を極めても彼らは天国に行けるとは限らないのです。イエスを信じているあなたは行くかもしれません。でも子供たちはどうでしょうか。子供のことをあなたは愛していないのでしょうか。自分さえ天国に行けばそれで良いのでしょうか。自分が会社で評価されればそれで良いのでしょうか。「子どもは子ども。俺は俺。」じゃないのです。子供たちに対して今なすべきことがあることを知って、今からでも遅くはありません。子供が遅ければ、孫にまだチャンスがあると思って下さい。諦めないで下さい。今からでも私の子供たちがイエス・キリストと共に歩むこと。これ以上に嬉しいことはない。喜びはないんだと。自分がまずその願いをもって強く意識して、そのことに対してあなたは全神経を全力を傾けて残りの生涯、それをライフワークとして頂きたいと思います。家庭のミニストリーこそ最高です。家庭で子どもたちが、または夫婦が揃ってイエスと共に歩む。神が1番喜んで下さることです。教会に何百人何千人何万人の人が集まっても、家庭がおろそかにされているならばそんなミニストリーは空しいだけです。ダビデと同じです。子供たちが皆神から離れ、墮落して傷ついて痛みを抱えながら生きていかなければいけない。これは辛いことです。仕事を捨てても、すべて自分の得たものを、積み上げたものをなげうってでも、今からでも遅くはないと私は思います。是非このことも他人事ではなくて、ダビデが反面教師ですから、是非ダビデを通して厳粛に受け止めて頂きたいと思います。自分の王国を自慢している暇があれば、自分がどれだけ頑張ってきたのか、どれだけ貯金してきたのか、どれだけ貯めこんできたのか、どんな地位を得てきたのか。そんな事は天国では問題視されないわけです。何にも評価されません。むしろ神様は私たちの心をご覧になって、家庭がどうであったのか。父親として、夫として、妻として、母として、私たちが神の前に正しいことをしてきたかどうか。そこが問われるということを知って下さい。あなたの仕事の活躍が神様から褒められる、評価される。まずないと思って下さい。もしあなたがイエス・キリストの御名の故に、神の栄光のために本気で外で働いているならば、勿論神は「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と言ってくれます。でも良い忠実な僕は、家族のことを省みます。なぜならばイエスがそういうお方だったからです。十字架の上で1番大切な仕事をしている時ですら、「ここにあなたの息子がいます。ここにあなたの母がいます。」と、長男の務めを果たしたわけです。母親のことを気遣ったわけです。家族のことをイ

イエスは愛していたのです。ですから 1 番大切な仕事、十字架の上での働きをしながらでもイエスは家族のことを省みておられた。模範があるわけです。十字架よりも大切な仕事をあなたが今やっているのでしょうか。「家族のことなど構ってられない。」とあなたは言うのでしょうか。そんな事はないと思います。後悔しないためにも是非耳痛いとして聞き流さないで下さい。私も後悔したくないので何度でも同じことを皆さんには伝えていると思うんですけれども。是非諦めないで、絶望しないで、嘆いてばかりいないで、後悔ばかりしていないで、もう一度プライドも何もかもかなぐり捨てて、もう一度正しいことを始めてみてはいかがでしょうか。そんな優しい言葉を本当は使うつもりはなかったんですけれども。始めなさい、と言いたいわけですから。勧めじゃないのです。アドバイスじゃないんです。これは神様があなたに求めておられることです。家庭を治めることが出来ない者は、当然教会を治めることは出来ません。家庭を治められないのに何も自慢出来るのでしょうか。是非ここから始めたいと思います。

もう一つ、イエスの弟子たちがイエスにとっては家族だったということも覚えて下さい。「あなたの母があなたを呼んでいます。兄弟たちがやってきていますよ。」とイエスに声がかかりましたけれども、イエスのその時に「私の母とは誰ですか。私の兄弟たちとは誰ですか。」と言いました。そしてイエスはご自分の言葉に聞き従う弟子たちを指さして「彼らこそ私の母であり、兄弟である。」家族だと言いました。何が言いたいのかと言いますと、本当の家族はイエス・キリストの弟子だけだということです。あなたの血を分けた、あなたの DNA の遺伝がそっくりそのまま、性格も悪いものも全部入ってしまっている子供でも、イエスの弟子でなければ彼らは天国では家族ではないのです。厳しいかもしれませんがこれが現実です。イエスにとっての母、イエスにとっての兄弟。それはイエスの言葉に聞き従う弟子たちだったと。これも他人事としてではなくて私たちにも当てはめなければいけません。この世では確かに婚姻関係があり、この世では確かに戸籍に彼らの名前があります。でも天国にその戸籍がそのまま持っていけるかと言ったら、そうではないのです。天国の戸籍は“いのちの書”だけです。そこにあなたの子供たちの名前は載っているでしょうか。あなたの妻や夫の親の名前は載っているでしょうか。兄弟の名前は載っているでしょうか。載っていなければ、彼らはキリストの弟子ではありませんから。彼らは天国にはいない人たちなんです。忘れてはいけません。今は目に見える世界で私たちは目に見える人たちが家族だと思っています。イエス・キリストを信じている者たちは皆家族ですけれども。あなたが自分の家族を愛するならば、命を落としても、すべてを<sup>なげう</sup>擲ってでも、きっとキリストの弟子になるように、キリストの言葉に従ってキリストと共に歩むように、そのために残されている半生を後世を費やすということ。これは決して愚かなことではない。無駄なことではない。これこそがやるべきことだと、きっと分かってくれると思います。多くの人はその時が来ないと分からないのです。「癌です。余命はあと 3 ヶ月です。」そう言われて初めて気付くのです。「この人はこのまま死んでしまう。死んだら天国に行くのか。確信が持てない。本当に天国で再会出来るのか。分からない。」まだそれは良い方です。ある程度のある意味で猶予期間があるからです。でも突然死んだらどうでしょうか。病気で突然前触れもなく死んだ。事故で急に死んだ。災害で急に死んだ。もう声をかけられないんです。もう冷たくなっているんです。「あの時ちゃんと伝えておけばよかった。逃げずに何と言われようとも、馬鹿にされようと思われようともそれでも伝えておけばよかった。あんな遠回しな言い方ではなくて、もっとストレートにはっきりと言っておけば良かった。」本気で愛しているならば、是非伝えて欲しいと思います。変に思われたくない、嫌われたくないというのは、<sup>ひとえ</sup>偏にあなたが自分を愛しているからです。自分を愛しているからそう思うのです。でも家族を愛するならば、本気で彼らが地獄に落ちるのを何としてでも食い止めたい。何としてでも彼らとは天国で会いたい。そのように強く願うならば、あなたにはもうやる事は 1 つです。是非迷うことなく速やかにチャンスが与えられている間にそうして頂きたいです。

そして、3 章 5 節。『エルサレムで彼に生まれた者は次のとおりである。シムア、ショバブ、ナタン、ソ

ロモン。この四人はアミエルの娘バテ・シュアによる子である。』バテ・シュアとは、あのバテ・シェバのことです。ダビデの忠実な家臣ヘテ人ウリヤの妻、人妻であったバテ・シェバとダビデは事もあろうに不倫関係を持ってしまったわけです。そしてその結果バテ・シェバはダビデの子を<sup>はら</sup>孕んでしまったわけです。夫は戦場でイスラエルのために、王のために命を張って働いているんです。その間に夫を裏切り、その間に家臣を踏みにじるようなことをしたんです。おぞましい罪を犯したわけです。でも発覚を恐れて、皆さんも知っての通りいろんな謀略をしたんですけれどももうまくいかずに、結局はウリヤを亡き者にしようと殺したわけです。でもバテ・シェバとの間に誕生した命は、すぐに絶たれてしまったわけです。その後の子供たちです。それが今読んだところにあります。5 節にある子供たちでシムア、ショバブ、そしてナタン、ソロモンはダビデの後継者です。それでも神様の憐れみでバテ・シェバを通してダビデの後継者ソロモンが与えられたわけです。驚くべき憐れみです。恵みです。そして、さらに興味深いことは、そのソロモンの前に出てくる名前、ナタンですけれども、これは預言者のナタンと同じ名前です。預言者のナタンは勿論ダビデの息子ではありません。ダビデの相談役と言いますか、ダビデの親友でもありました。その預言者ナタンが実はバテ・シェバとの罪を暴くんです。ダビデに対して（自分の上司です。）友人でもありませんけれども、王に対して王の罪を指摘する。これは命がけです。勇気が要ります。首がかかっているわけです。場合によってはダビデがもみ消すためにナタンまで殺すということも考えられたわけです。でもそれでもナタンは神に忠実に誓って仕えて、そしてダビデに対して彼の罪を真っ向から公然と指摘したわけです。その結果ダビデは即刻その場で罪を認めて、すぐに悔い改めました。これがダビデの素晴らしさです。開き直ったのではなくて、すぐに悔い改めたのです。これが私たちが見習うべきところです。これが神が喜ばれることです。私たちは罪を指摘されても「ちょっと考えさせて下さい。」とか「来週までには悔い改めようと思います。」とか「本当にそれは罪なのか。自分なりに調べてから。」とか言い訳をして逃げ回るものです。でもダビデは弱かったです。過ちも犯しました。取り返しのつかないことをしましたけれども、でも神様から罪を示されたら素直に正直に即刻罪を認めて、即刻その場でその罪を捨てて告白して、そして悔い改めたわけです。「ナタンよ、よくぞ言ってくれた。とつても言い辛かっただろう。あなたの王がこんなおぞましい罪を犯して、あなたはきっと心を痛めたであろう。怒りも込み上げただろう。苦々しさもきっとあなたは私に対して抱いたであろう。でもこんな私をあなたは憐れんで、神に忠実な者として勇気を持って命をかけて私に罪を指摘してくれた。私を戒めてくれた。私を叱ってくれた。ありがとう。本当にあなたはかけがえのないことをしてくれた。だから私の息子にあなたの名前を付けさせてもらいたい。」ナタンの名前をダビデは使ったのです。「是非自分の息子にあなたの名前を付けさせて欲しい。」これはダビデの感謝の現れと言っていると思います。箴言 27 章 5～6 節にこう書いてあります。『**あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにまさる。憎む者が口づけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。**』ナタンはまさにこれをしたんです。あからさまにダビデを責めたんです。でもそれはひそかに愛するのにまさること。憎む者が口づけしてもてなすよりは、イスカリオテのユダがこれをやりました。でも、**愛する者が傷つけるほうが真実であると。**皆さんも躊躇せず恐れず、愛する者をあからさまに責めて下さい。「こんなことを言ったらきっと傷つくに違いない。」とか「こんなことを言ったら気を悪くするに違いない。私のもとを去っていくに違いない。教会を去っていくに違いない。」そのように恐れて私たちは、ひそかに愛する方を選ぶかもしれません。でもひそかに愛するよりもっとまさって、あからさまに責めることの方がこれは大切なんです。それに気付く者はダビデと同じように、あなたに対して感謝もしきれないほど喜んでくれます。「ありがとう。あんなきついことを言ってくれて。言い辛かっただろうに、勇気も要っただろうに。私から嫌われたり、私がブチキレたり、そういうことも恐れずによく言ってくれた。ありがとう。」そのようにきっと分かってくれる人には、あなたはかけがえのない存在になります。でも嫌われたくないから「ひそかにあの人のために祈っています。」とか。祈ることも大事です。でも、

あなたが罪を示されるならば、神様からの促しを得たならば、あなたは神に対して忠実な者でなければいけません。そして本当にその人を愛しているならば、あなたはあからさまに責めるということをしなければいけません。勿論愛をもってなされることです。断罪したり、見下したり、貶したりするつもりで行うではありません。愛しているからこそ、あからさまに責めるのです。今の私が皆さんにやっていることと同じです。私が皆さんをいつもあからさまに責めていけば、きっと1人2人と教会に来なくなるのを私は知っています。甘い言葉で「ありのままではあなたは愛されています。そのままがいいですよ。」とか、「まずは自分自身を愛さなければ、人をどうやって愛せるんですか。まずは自分をもっと愛して下さい。」そう言った方が耳障りが良いですから、皆さんは喜んで続けて来るかもしれません。聖書にそんな事は書いてないのです。自分を愛すること、それは罪です。私たちは神を愛することと隣人を愛することだけを命じられています。自分を愛することは命じられていません。ですから「自分を愛するな。」なんて言うと、傷ついてショックを受けて、「もう来週から来ません。」そういうこともあるわけです。勿論私は皆さんには続けてここに来て欲しいと願います。でも、つなぎとめるためにとか、教会の人を増やすために、教勢を伸ばすために、ここに私は立っているのではないのです。皆さんを勿論痛めつけたり、悲しませたり、傷つけたりすることを目的とはしていませんけれども、でも時には真実というものは人を傷つけるんです。でも私はいつもベターな方を選びたいと願っております。優れた方、そちらを選びたいと願っているだけです。ですから、ナタンは素晴らしいことをしたということをお皆さんにしっかりと覚えて、それは自分の息子にそのまま名前が引き継がれていく素晴らしいダビデにとっては忘れえぬ友情の証だったということです。

次に**3章10節**、『ソロモンの子はレハブアム。その子はアビヤ、その子はアサ、その子はヨシャパテ、』と続きますけれども、ここでレハブアムというのがソロモンの息子で、結局レハブアムの時代にイスラエル統一王国は北と南に分断されて、北はヤロブアムという人がクーデターを起こして10部族をまとめて北イスラエル王国を勝手に樹立してしまうわけです、独立してしまうわけです。そして南ユダ王国はレハブアムがそのまま樹立するわけですが、王国は南北に分裂してしまうわけです。

そして、**4章**は来週にします。**4章**は『ヤベツの祈り』が記録されているんですけれども、実は今日皆さんに用意した週報にはヤベツの祈りについて書いてあるので、人間的にはヤベツの祈りまでは何とか行かないと週報の内容をカバー出来ない。これは人間的な思いで、今悔い改めました。そのために私はここにいるのではないので、週報は無駄になるかもしれませんが、でも来週にこのヤベツの祈りを見たいと思います。皆さんはヤベツの祈りを聞いたことがあると思います。『ヤベツの祈り』というタイトルの本もアメリカでもそうですが、世界中の言葉に訳されてベストセラーとなりました。その本を私は特別に勧めてはおりませんが、いろいろな問題があるので勧めてはいませんけれども、でもヤベツの祈りというのは、聖書の祈りです。聖書の祈りは、勿論神の御心にかなった祈りです。そしてこれは私たちも見習うべき祈りです。主の祈りと同じようにして私たちはこれを価値ある祈りとして、神にきっと必ず届く祈りとして、私たちの使うことが出来る祈りです。勿論これは自分の成功繁栄を手に入れるためのフォーミュラー（公式）のような祈りの形式、呪文のような祈りではありません。この祈りさえ祈っていれば祝福されるとか、繁栄されるとか、そんなことじゃないんです。そういうふうに書かれている本はいっぱいありますけれども。そうではなくて、ヤベツのような心でこの祈りを捧げるならば、きっと神は応えてくれます。神はあなたを祝福したくて、祝福したくて堪らないのです。ヤベツは名前の通り“悲しみの人”でした。ヤベツとは「悲しみ」という意味です。その悲しみの人が祈った祈り。期待出来ます。そして彼が祈りに応えられて、どれほど神様から祝福されたのか。そのことを次回見たいと思います。今晚本当は見なかったんですけれども、2、3分で話せるような内容ではないので、次回是非楽しみにして頂いて。ユダの子孫です。ユダ部族の子孫、**4章**に沢山のカタカナの名前の羅列きりだと思っているかもしれませ

んが、その中にヤベツだけは但し書きというか、ヤベツという人物が如何に際立っていたのかということが書いてあって、そして彼の祈りまでも記録されている。あまり有名ではない人物かもしれませんが、この祈りによって有名になった人物です。是非次回期待をして頂いて、またここに戻ってきて欲しいと思います。また耳痛い話を聞かされるなんて思わないで欲しいと思います。皆さんを愛しているから聖書の言葉そのものを伝えようと私は試みているわけですが、もし不快な思いをさせてしまっているならば申し訳ないと思っています。心から謝りたいと思いますけれども、でももしあなたが聖書の言葉そのものにつまずいているならば、私は謝るつもりは1つありません。是非この言葉に従って欲しいと思います。この言葉に答えて欲しいと思います。神の言葉に応答して、そして神の望まれるあなたになって欲しいと思います。系図からもっともっと沢山のことを学ぶことが出来ますので、是非家に帰ってから私が飛ばしたところとか、特別深く触れなかったところ、そこにも是非目を留めて頂いて、そこには宝が沢山隠されています。宝探しをするようです。ですから私は系図を見るとワクワクしてくるのです。この中に沢山の宝物が隠されていると思うと、本当に楽しくて時間が過ぎるのを忘れしまいますけれども、メッセージはそういうわけにはいかないのです、先に進めなければいけませんので、ちょっとこういうふうに飛ばす形式になっていますけれども、皆さんは家でじっくりともう一度この系図と向き合って欲しいと思います。ですから是非この系図でしっかりと神様との素晴らしい関係を築いて頂きたいと思います。では今日はこれで終わりたいと思います。